

追悼・江沢民元中国共産党総書記・国家主席

大使として接した 社交的指導者の実像



江沢民 こうたくみん／ジアンズォーミン
(1926年8月17日～2022年11月30日)
江蘇省出身。上海交通大学卒業。上海市長、中国共産党中央政治局委員・上海市委書記などを経て、1989年6月天安門事件で失脚した趙紫陽に代わり党総書記（～2002年）、同年党中央軍事委員会主席（～04年）、93年国家主席（～03年）に就任。98年には中国の国家主席として初めて日本を訪問した。

1998年11月、宮中晩餐会で乾杯する江沢民中国国家主席（左）と天皇陛下（時事）

元駐中国大使

谷野作太郎

たにの さくたろう 一九六〇年
東京大学卒業、外務省入省。アジア局長、内閣外政審議室長、駐インド大使などを経て一九九八～二〇〇一年駐中国大使。著書に『中国・アジア外交秘話』『外交証言録 アジア外交』など。

私は、一九九八年四月から二〇〇一年三月までの間、在中国日本国大使の任をいただいておりました。その間、江沢民氏はずっと党総書記、国家主席の任にあり、したがって信任状を奉呈した先も、また大使の任を終えて離任の挨拶

に赴いた中国のトップも同じ江沢民氏でした。最後に離任の挨拶に赴いた時、江沢民氏は私に対し「タシ。いつでも北京に帰っていらっしゃい。滞在中の日程は自分がつくるから」と。もちろん、そんなことはありません

ないのですが、去りゆく者への精いっぱいのはなむけの言葉だったのでしょうか。

いずれにせよ、北京在勤中、単独で会ったり、あるいは日本から北京を訪れる政治家や経済界など各界の代表団が江沢民氏と会談される際、日本からの客人方にお伴して必ず出席しておりましたので、江沢民氏を間近でじっくり観察する機会が多々ありました。したがって同氏については、いろいろと思いがつきません。なお、江沢民夫人は小柄で、目立たない、良い意味で地味な方でした。人前でご主人を「ダーリン」と呼び、腕を組む李鵬夫人とは、正反対の人でしたね。

経済発展の礎となったWTO加盟

江沢民時代、中国がなしたことはいろいろあります。なかでも二〇〇一年二月の世界貿易機関（WTO）への加盟は、鄧小平氏の改革・開放政策を受けて、中国経済のさらなる発展に向けての大きな契機となりました。

WTOに加盟するということは、中国の経済運営を厳格な国際ルールに則って、厳しい国際競争の場にさらすことです。したがって、かつて日本でもあったように、往々にして個別の業種を所管する役所（たとえば、日本でいえ

ば農林水産省）から、「急に、そんなこと言われても……」と激しい抵抗の声があがる。当時の中国では、そんな「抵抗勢力」の中心人物は李鵬氏（全人代委員長、前職は国務院総理）と言われていました。しかし結局、中国経済を鍛え、国際的な競争力をつけるには、その道（WTO加盟）しかないという朱鎔基総理とその配下の対外貿易部など対外開放派の主張が通り、最終的には江沢民氏の支持をとりつけ、〇一年末のWTO加盟となったわけです。そして、これが成功を収めた〇八年の北京オリンピック、あるいは一〇年の上海万博へとつながってゆきます。

WTO加盟までの間、日本政府（経済産業省など）は、往時の日本のGATT（WTOの前身）加盟の際の苦労、経験を中国側と存分に分かち合い、いろいろと助言もしました。加盟が成ったあと、朱鎔基総理は私に對し、あの時の日本政府の助言がいかにありがたかったか、「感謝、感謝」と述べていたことを思い出します。

いずれにせよ中国はWTO加盟の結果、中国の経済運営に対する国際的信認の度合がぐんと高まりました。中国が、この面で何か国際ルールに悖（もと）むことをすれば、被害を受けた国はジュネーブのWTO本部に訴え出て、「裁判で決着つけようじゃないか」と言えることになったわけですから。

もつとも、その後中国はWTO加盟時のコミットメントをさぼって、国際経済ルールに悖ったことをいろいろやっているとして、国際社会が問題にしていることは、ご承知の通りです。他方、中国の方も最近、先端的な半導体製造などの分野で米国による一方的な締めつけに遭い、アタマにきてWTOに訴え出ています。しかし、肝心のその世界貿易の守り神のWTOが、トランプ政権以来の米国の横槍でほとんど機能していない。残念なことです。

政治参加の裾野を広げる改革も

江沢民氏の功績としていま一つ思い出されるのは、氏が二〇〇〇年初頭に発表したいわゆる「三つの代表（三個代表）」論です。そもそも、中国の憲法には「中華人民共和国は、労働者階級が指導し、労働同盟を基礎とする人民民主主義独裁の社会主義国家」と規定されているのですが、彼は、労働者と農民に加え、私営企業家の入党も認めると言い出し、この人たちを積極的に共産党に誘いこみ、これを中国経済の発展につなげていったわけです。その象徴的人物の一人は巨大IT企業をたねるジャック・マー氏でした。最近では、中国共産党批判の言辞が習近平の忌諱（ききん）にふれ、ウツウツした日々なのですが。

そのほか、基層の自治組織である居民委員会や村民委員会の主任といった職に対し、複数の人の立候補が許され、その地区の人たちによる直接選挙制が導入されたのも江沢民時代のことでした。当時、ある日のこと、中国共産党の中央党校の若い研究員が私のもとに訪ねてきて、目を輝かせながら一冊の本を手渡し「ほら、タイシ、中国でもやっ」と政治改革^レについての具体的研究、探索作業が始まりましたよ！」と述べていたことを思い出します。

しかし、そのような動きは、江沢民氏のあとを継いだ胡錦濤氏の時代を最後にストップし、習近平氏の時代になるとあの毛沢東時代に先祖返りした感がある最近の中国です。このことは本論の末尾でもう一度ふれることにします。

社交的な性格 興に乗れば炭坑節も

北京で日本からの客人たちと会う時の江沢民氏の話の筋は、大体決まって次のようなものでした。

①（まず、「客人方のお話をうかがいたい」として日本側の発言を促した後）、話はまず唐の時代の日中交流の歴史から始まり、遣唐使、そして阿倍仲麻呂、さらには江沢民氏の故郷、楊州（江蘇省）の鑑真和尚の話（日本が中国から学んだ時代）になり、

②次いで、日本の明治時代の話になって、あの時代は、中国は和製漢語の導入など日本から多くを学び、とり入れた、と。

③しかし、話はここでは終わらず、話題は一転してその後の一時期の「日中の不幸な時代」の話となる。

④最後には、「日中両国は『歴史』を鏡として未来を開こう」（『以史為鑑、開拓未来』）と話を締める。

とにかく、外国からの客人に会うことを厭う風は全くなく、むしろそれを楽しんでゐるようでした。中国の指導者にはあまりないタイプです。日本から代表团が入室してくると、先ずは日本語で「ドウゾ、オカケクダサイ」と。時には、突然、天井を指さしながら「アレハ、デントウ デス」などと。興に乗れば炭坑節を口ずさむ。私が信任状を奉呈した時もそうでした。厳肅であるべき信任状奉呈の場で、いきなり炭坑節ですからね。驚きました。

歴史問題には厳しい姿勢

他方、日本に対しては「歴史」の問題をめぐるては厳しい人でした。江沢民氏は、青年時代を上海で過ごしていますが、当時、上海を占領していた日本軍に軍犬をけしかけられ、背中に大きな傷を負ったという話が伝わっています。

また江沢民氏は、楊州の名門校、楊州中学の出ですが、こは、戦時中に日本軍が接収したこともありました。そのようなことで、江氏は、日中戦争の時期には南京で抗日学生活動に参加していたと言われます。

そんなこともあってか、一九九八年の日本訪問の折は、共同宣言にいわゆる「歴史認識」のことをどう書き記すかをめぐって大変もめたのですが（もつとも、それとて中国側の当初の要求はたいへん穏やかなものでした。しかし、これが同じ年の韓国の金大中大統領の日本訪問の際発表された共同声明との関係で、中国側の主張も突如、たいへん固いものになった）、この辺の事情については、紙幅との関係でここで述べている余裕はないので、ご関心ある向きは拙著『外交証言録 アジア外交 回顧と考察』（岩波書店、二〇一五年）をご参照ください。

一九九八年の訪日は、「歴史」をめぐるやりとりに焦点が当たった結果（日本のメディアはこの点ばかりを報道し、また、その内容も一方的な思い込み、誤報の類が少なくなかった）、ほろ苦い感じを残したものになってしまいました。が、実は、この折発表された日中（中日）共同宣言の中に、今日、ウクライナ戦争をめぐるて正しく今日の問題である国連（とくに安保理）のあり方をめぐって、次のような重

要な部分があります。「(日中)双方は、安全保障理事会を含めた改革を行うことに賛成する」(傍線・筆者)。この部分、中国側は今もこの立場に変更がないのかどうか、一度、先方に聞いてみたいですね。

折しも、日本は今年から安全保障理事会に席を得たのみならず、一月いっぱい議長国。国連発足当時と比べて、加盟国も約四倍に増えた今日、国連、とくにその中核である安保理が、旧態依然の姿、形であつてよいはずがない。日本政府には、ここはひと踏ん張りしてほしいと思います。

「長征幹部」とは異なるテクノクラート出身

江沢氏は一九八九年のあと、鄧小平氏に引き揚げられて、突然上海(当時、上海市委員会書記)から中南海入りするのですが、当初は周囲に気がねして、オドオド、ビクビクした風だったと言われています。もちろんそのあと年を追うごとに最高指導者としての風格を身につけていくわけですが、それでも往時の指導者たちと違って、所詮テクノクラート上がり(上海での工場勤務のあと、第二工業部に勤務)、仲間たちの間では、「なに、所詮はオレたちの仲間。運良くえらくなっただけ」とみる風もあったようです。たしかに往時の中国の指導者たち、とくに周恩来、鄧

小平といったあの長征(一九三四〜三五年)をくぐつて来た人たち(長征幹部と呼ばれる)には、すこみもあり、独特のオーラがありましたね。

そんな江沢氏と最後に会ったのは、二〇一〇年九月、福田康夫元総理のお伴をして北京に行った時でした。場所は中南海の瀛台^{えいたい}、清の末期、西太后にいじめられた第一代皇帝光緒帝が長きにわたつて幽閉されていたところです。江沢氏は、引退後はここを事務所として使っていました。彼は福田氏に会うなり開口一番「自分は、職を退いたあとは原則として外国の賓客には会わないことにしているのだが、何しろ福田先生は私の『老朋友』だから……」と。でも福田氏と江沢氏の関係は老朋友同志と言われるような深いものではない。やはり日本からその要人の来訪となると社交好きの血が騒いだのでしょうか。話自体はたわいもない話で、「最近健康に気をつけて毎日泳いでいる。またアタマが衰えないように英語の勉強も……」といったものでした。しかし最後に「今日、こうやって福田先生とお会いしたことは表に出さないでほしい」と念押しがありました。「はあ、やはりこうやって表に出ることについては、国内の批判を気にしているのだな」と苦笑したものです。

そんな江沢氏も、その後ついに「もう、いい加減にし



1999年5月、菅直人民主党代表訪中時に江沢民氏と握手をする筆者（筆者提供）

ろ！」と中南海から追い出され、爾後、上海に住んでいたようです。そして、その後は世間の話題になることもなく、昨年一月三〇日逝去（九六歳）。遺骨は北京から上海に移送され、上海の軍港から江氏の故郷の名を冠した海軍艦

艇「楊州」で長江の河口まで運ばれ、生前の本人および遺族の意向により、そこで海に散骨されました。これは、鄧小平氏の要請で権力を引き継いだ彼が、鄧氏の散骨の先例を強く意識してのことだったと言われています。

国際協調路線は過去のものとなったか

中国にとって、江沢民・胡錦濤氏らによって引き継がれた鄧小平流のやり方が良いのか、それとも近年の習近平流が適うのか。これは、もちろん、中国の人民たちが選択すべき問題です。しかし、世界が、とくに経済の面で相互依存が深まりゆく中で、中国の発展の軌跡は今や、その他の国々にとってヒトゴトではない。軍事大国へ突き進む中国（陸から海洋への進出など）については、江沢民時代にすでにその兆しがありました。日本との関係でいえば、日本の経済水域内での活発な「調査活動」、ある時は、中国の軍艦が日本の四島の周りを遊弋するなど。「日中関係にも心配の種が増えたな」と複雑な思いを抱きながら、北京を後にしたことを覚えています。中国の発展自体に異をとねえるものではなくありませんが（それは、アジア、世界の利益でもある）、その道筋は、あくまでも国際社会の支持、祝福を受けながらのものであつてほしいと思う昨今です。●